

創作少年少女小説

海の日曜日

今江祥智



NDC 913

著者の諒解により
検印省略

創作少年少女小説

うみ にちようび
海の日曜日

今江祥智 著

実業之日本社 1966年

200 ページ

21.5cm

海 の 日 曜 日

1966年12月25日 初版発行

1967年7月15日 13版発行

著 者 今 江 祥 智

発行者 増 田 義 彦

印刷所 星野精版印刷株式会社

発行所 株式 実業之日本社
会社

東京都中央区銀座西1~3

TEL (561) 5121 振替東京326

定価 400 円



海の日曜日

今江祥智

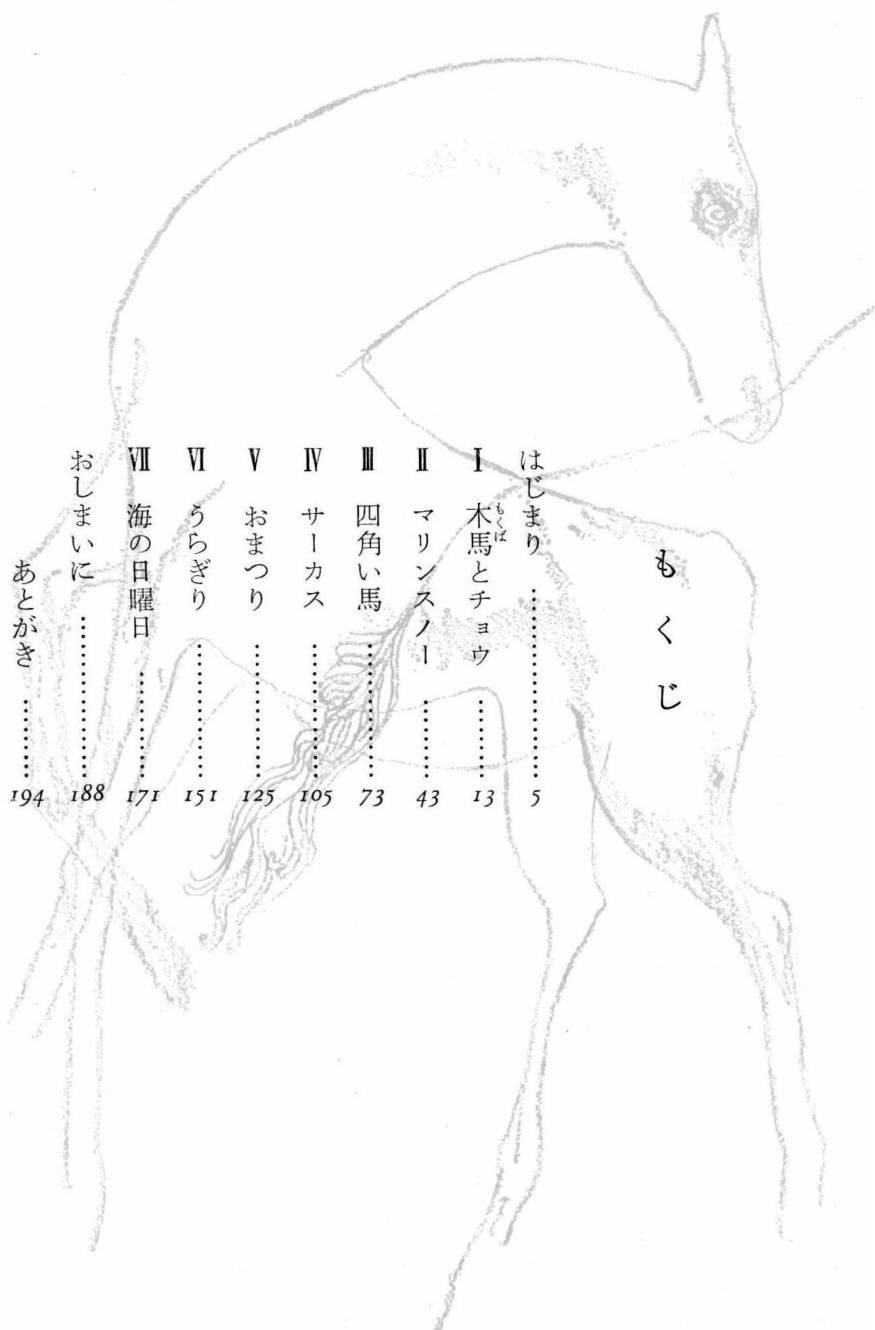


埼玉県立
川越図書館
A09270
示公

はじめに

いつまでもだいじにしたい——と思いながら、ひとつ、またひとつとなくしてしまふ、けれどこれだけは——と、にぎりしめたてのひらに、のこっているものは、なんだろう。





もくじ

はじまり	5
Ⅰ 木馬とチョウ	13
Ⅱ マリンスノー	43
Ⅲ 四角い馬	73
Ⅳ サーカス	105
Ⅴ おまつり	125
Ⅵ うらぎり	151
Ⅶ 海の日曜日	171
おしまいに	188
あとがき	194

装幀・さしえ

宇野重喜良

はじまり

曜子ようこのおじさんは、ほかのおとなとは、ちょっとちがっていました。こんども、しばらくぶりで曜子ようこの家にやってくるようになったのですが、そのときの電報でんぽうがこうなのです。

『六ヒ一七ジ ツクムカエタノム』チヨウチヨトツタトツタ』ヨウスケ』
にいさんまさおの正男と、空港くうこうのロビーでまちながら、曜子ようこは、その電報でんぽうの
もんくをおもいだしては、わらってしまうのでした。

おじさんは大学の数学の先生で、もう四十一にもなります。それが、チヨウチヨをとり、わざわざホンコンまででかけたのです。

おじさんがチヨウチヨすぎで、チヨウのひょうほんを何千ともっていることはしていました。チヨウの話なら、ほかのおとなが、自動車や



野球の話をするのよりも、もっとねっしんにしてくれることもしっていました。それにしても、まさか、ホンコンあたりまで、チョウチョとりでかけるとは、おもいませんでした。そのことをしらせてきた手紙を読んだ曜子のおとうさんは、おかあさんに、

—おとうとのやつ、いよいよ、病やまいこう、こうに、い、る、つ、てとこだねえ。
と、あきれたようにいいました。

けれど、おかあさんは、ちょっとわらっただけで、なんともいいませんでした。そして兄妹きょうだいは、そんなおじさんのことを、前よりももっとすきになって、ふたりでむかえにいったというわけでした。

めずらしく飛行機ひこうきが時間どおりについたのに、おじさんがでくるのには、ずいぶんてまどりました。やつのことで、いちばんおしまいにできたおじさんは、ふたりにていねいにおじぎをしてから、いいました。

—ごめんごめん、またせてしまったね。なにしろ税関ぜいかんのかかりのやつ、わしのにもつのなかみが、チョウダといっても、ほんとにしよらんのだ。

みんなひっくりかえしてしらべよったもんでね。

それから、とっとと歩きだしながら、つけくわえました。

—またせたおわびに、モノレールをおごるよ。

兄妹は、まだモノレールにのったことがなかったので、おおよろこびで、あとにつづいてかいだんをおりてゆきました。

モノレールは、羽田空港から東京の町なかまで、ひと走りでゆけるあたらしいのりものです。空港の地下の駅をでて、みじかいトンネルをぬけると、一本レールはぐっと高くなって、目の下に、黒いうめたて地が見えます。そのまんなかを、ほそいほりわりがまっすぐに走り、海は、ずっとむこうまで押しやられて、ハンカチほどの大きさで光っています。モノレールが、ほりわりの水にうつるのを見おろしたおじさんは、うれしそうにいました。

—こいつ、形がチョウの終齢幼虫にておるぞ。

—シューレーヨーチュー？

兄妹は、めずらしいおかしの名でもいうようにくりかえしました。

—うん。わかりやすいえば、アオムシさ。



そういわれてみれば、モノレールは大きな大きなアオムシに見えないこともありません。なんでもチョウとむすびつけてしまいたがるおじさんは、きつとまだ、ホンコンでのチョウチョとりの氣ぶんから、さめきっていないのでしょうか。

そんなおじさんのようすを見て、またあの電報のもんくをおもいだし、くすんとわらってしまった曜子の肩を、にいさんが、とんとたたきました。

—曜子、ごらん。あんなところをチョウがとんでるよ。

—なになに、ふむ、アサキマダラだな。

こういったのは、むろん、おじさんです。

ムシがすきですぎでたまらない、いわゆるムシヤともなれば、とびかたを見て、ほんのちよつぱりでも、はねのいろをたしかめられれば、ちやんとしゆるいがわかるらしいのです。おじさんの指さすほうをよくよく見て、曜子もや々とチョウを見つけられました。風がないせいでしょうか。チョウはおどろくほどしつかりとんで、ほりわりをこえ、建物がいくつものならぶ上をすすみました。すぐむこうの競馬場づきの厩舎の上

でした。

—競馬^{けいば}でも見にゆくつもりかな。

おじさんがわらいながらいいましたが、まっすぐに競馬場^{けいばじょう}のほうへむかつてとんでゆくチョウを見ていると、囃子^{やうこ}も、もうすこしで、ほんとにそのつもりかしら……といったくなるほどでした。

そのあたりでモノレールが大きくまがると、下のほりわりのはばがひろがり、小さな船がいくつかうかんでいるのが見えました。そんな船のひとつから、男の子が顔をだしたのを見つけて、囃子^{やうこ}が声をあげました。

—あら、あんなところにも、人がいるわ。

—水の上のジプシーの一族^{ぞく}だな。ホンコンにも、なかまがいっぱいたよ。

おじさんがいいました。

—学校で、ああした人たちのことを、まだおそわっていないのかい。それからおじさんは、水上でくらしている人たちのことを、いろいろ話してくれました。ああして、川や海にうかぶ船にすみ、ジプシーのよ



うに、仕事^{しごと}によってあちこちうごきまわる人たちがたくさんいることを、曜子^{ようこ}ははじめてしりました。でも、数学とチョウチョのほかに、おじさんがそんなことにもくわしいのには、正男^{まさお}もすしおどろきました。わけをたずねると、おじさんはわらいました。

「わしらムジャなかまには、いろんなれんちゆうがいるさ。ホンコンの友だちのひとり、じつはその海のジブシーなんだ。こんどの旅^{たび}でも、その男の船にひとばんとめてもらったんだ。

そこでおじさんは、ホンコンで見た、かぞえきれないほどの小船^{ジャンク}のようすをおもいだして、ちよつとのま、目をほそめました。——おなじころ、さつき、船から顔をだした男の子も、目をほそめて、チョウのゆくさきを見つめていました。チョウが厩舎^{きゆうしや}の列^{れつ}の上をとびきつて、競馬場^{けいばじやう}の上にきてしまふまで、男の子は目をはなしませんでした。それから、

——いよいよ、あしただなあ。
と、ひとりごとをいいました。

おじさんの思い出の中から、ジャンクのむれがぎえました。そのかわ

り、おじさんの目に、ジャンクのかずの何倍なんばいもの人ひとが、ながれるように歩いているのがとびこみました。モノレールが東京の町なかにはいったのです。

—あいかかわらず、ものすごいかずの人ひとだなあ。

おじさんは、あきれたようにいって、足もとの特大とくだいトランクふたつを、かるがるともちあげました。なかみがチョウドとしらない人ひとが見たら、おじさんはいへんな力ちからもちに見えたにちがいありません。たぶんそのおかげでしょう。人ごみの中を、ヤッコダコみたいにつっぱって歩いてきたこわいおにいさんおにいさんにトランクをぶつけたときも、おじさんは大またで歩くのをやめずにすみしました。おにいさんが、トランクとのっぽのおじさんを見くらべて、ちっと、舌したうちしたただけで、いってしまったからです。

そのかわり、あとからついてゆく兄妹きょうだいは、ほとんどかけ足でゆかねばなりません。チョウチョを追って、野山をかけまわるのになれているおじさんの足は、なかなかたっしやなものでした。おじさんは、そんな足あしにものものをいわせて、すこしでも早く、そのいやな人ごみからぬけ

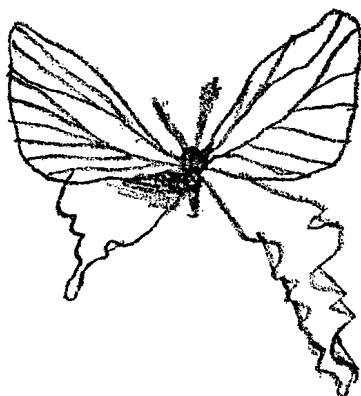


だそうとしたのでしょう。なぜだか、うしろからついてゆく兄妹のうち、正男まさおのほうがすこしおくれました。

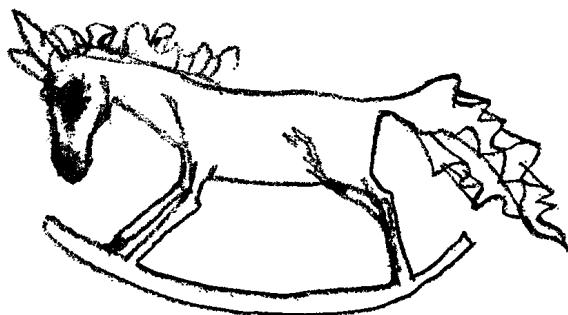
けれどそのときはもう、三人は、人ごみのまったなかにはいっていません。正男まさおがよいおくれるようです。そこで、やっとおじさんが立ちどまり、ふりむいて、じぶんから正男まさおのところへかけもどってゆくのが見えました。おじさんは、ていねいにおじぎをして、正男まさおに何かわびているようです。けれど、人の洪水こうずいにさえぎられて、よく見えませんし、むろん、声はきこえません。

しばらくしてから、こんどは三人がならんで歩きだしました。

三人が東京の町なかに、すいこまれるようにきえていったころ、さっきの船の男の子のほうも、ゆっくりと船の中の『ざしき』にきえました……。



I ^{もくほ}木馬とチョウ



1. ^{もくほ}木馬.....14
2. 銀の馬.....21
3. チョウ.....29

1 木馬

船の中の『ざしき』にはいると、三郎は、にいちやんがかえってくるまで、すこしねむることにした。このあいだからつづけていた仕事を、きのうのばんはぶつつづけであげてしまい、にいちやんはいま、かんじょうをとりに、おかにあがっていた。

そいつをもらってきたら、三郎にもこづかいをくれるやくそくだった。

―きょうのぶんをくわえると、もう三千円をこえるぞ。耳のかたっぽぶんくらい、あるかもしれないや。

三郎は、小声で、みょうなひとりごとをいった。船の上で、にいちやんとふたりぐらしの三郎は、ひとりでいることがおおかた。それで、いつのまにか、ひとりごとをいうくせがついてしまったらしいのだが、耳のかたっぽとは、なんのことだろう。

けれど三郎は、それきり口をきかず、『ざしき』のまんなかで、大の字になって目をとじてしまった。

しばらくして、三郎の船のすぐよこを、おなじような船がゆっくりとすべっていった。

三郎の船がふうわりとゆれ、^{ざしき}のすみっこにあった木馬^{もくば}が、ゆたん、ゆたんとゆれた。

——二郎^{じろう}さあ、おるかあい……。

よこをすべる船から、のんびりしたちようしで、三郎のにいちやんの名をよぶのがきこえたが、へんじはなかった。三郎もうねむってしまったものとみえる。声をかけた男もそれきりで、船はそのまま、ゆっくりと遠ざかっていった。

三郎の船では、木馬^{もくば}だけが目をさましていた。夜のいろのからだのうち、そこだけが明かるいレモンいろの目を見ひらいて、起きているのだった。

ところがよく見ると、木馬^{もくば}の背^せには、うっすらとほこりがつもっていた。木馬^{もくば}は、このころずっと、人をのせていなかったのだ。こわれたすべりだいのように、見すてられ、^{ざしき}のすみにかたづけられていた。それでも木馬^{もくば}は、船がゆれるたびに、前とおなじように、ゆっくりとからだをゆすった。ただ、前とはちがって、いまではもう、三郎は見むきもしてはくれなかった。

けれど、ほんのすこし前までは、三郎と木馬^{もくば}とは、すてきな友だちづきあいだった。三郎は、木馬^{もくば}なしに一日もすごせなかった。それも、この三年あまりものあいだ、ずうっとそうだった——。